

令和 5 年 5 月 16 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02290

研究課題名(和文) 弥勒造像史における「間-世界性」表現の系譜

研究課題名(英文) A History of Representations of the Bodhisattva Miroku from the Perspective of This Life and Life in the Afterworld

研究代表者

泉 武夫 (Izumi, Takeo)

東北大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：40168274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,000,000円

研究成果の概要(和文)：弥勒は未来の仏と予言され、現在は兜率天浄土に菩薩として住する特異な存在である。中央アジアから中国・朝鮮半島・日本における弥勒および兜率天の図像的系譜と宗教的観念の対応関係を考察するのが、本研究の目的である。今回はこの研究テーマに即する第三次プロジェクトに位置づけられるが、主として敦煌壁画以外の中国大陸および西域の弥勒上生経变(兜率天宫図)の遺品を調査した。山西省開化寺壁画(北宋期)、河西地区の文殊山万仏寺壁画(西夏期)、新疆トルファン・ジムサル県の北庭高昌回鶻仏寺址の壁画(西ウイグル王国期)がその対象である。その結果、これらはすべて図像的な影響関係にあることが初めて確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、弥勒菩薩像と兜率天の造形に関する研究プロジェクトの一環である。すでに、科学研究費補助金の交付を受け「兜率天往生の思想とのかたち」(平成19-23年度)、および「菩薩形弥勒と浄土・現世の交通」(平成24-27年度)という研究テーマのもと、インド以来の兜率天弥勒の信仰と造像の変化をたどるとともに、兜率天浄土と現世を行き来する弥勒菩薩の形象の生成と変容の諸相について調査研究してきた。今回の第3次プロジェクトにおいては、中国北宋期および西夏期、さらに西ウイグル王国期の上生経变の遺品について有機的関連を見出すことができた。これは有意義な新知見と考える。

研究成果の概要(英文)：Miroku is a peculiar being who is predicted to be the Buddha of the future and currently resides as a bodhisattva in the Pure Land of Tusita(Tosotsu). The purpose of this study is to examine the correspondence between the iconographic genealogy and religious ideas of Maitreya and Tosotsuten in Central Asia, China, the Korean Peninsula, and Japan. This research project, which is positioned as the third project in line with this research theme, mainly investigated paintings in mainland China and the western region other than Dunhuang wall paintings. The murals of Kaihua Temple in Shanxi Province (Northern Song Dynasty), the murals of Wenshushan Wanfo Temple in Hexi District (Western Xia Kingdom), and the murals of the Gaochang Huiying Buddha Temple Ruins in Turfan-Jimsar County, Xinjiang (West Uighur Kingdom). As a result, it was confirmed for the first time that all of these have an iconographic influence relationship.

研究分野：美術史

キーワード：弥勒菩薩 兜率天 上生信仰 浄土 来世

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

この研究は、平成 19 年度以降、科学研究費補助金の交付を受けて「兜率天往生の思想とそのかたち」(課題番号 19320021、平成 19～23 年度)、それを継承した「菩薩形弥勒と浄土・現世の交通」(同 24320026 平成 24～27 年度)というテーマを設定し、インド以来の兜率天弥勒の信仰と造像の変化をたどるとともに、兜率天浄土と現世を行き来する弥勒菩薩の形象の生成と変容の諸相について調査・分析してきた。その中では、おおよそ以下のようなことが明らかとなった。

ガンダーラ周辺に発生し、中央アジアで定型化した弥勒菩薩交脚像が中国に入って倚坐像から結跏趺坐像へと変化した。さらに五代から宋にかけて塵尾扇をもつ持扇像が出現して、中世日本に伝来・普及する。

ガンダーラの遺品、さらに中央アジアおよび中国・南北朝時代には交脚弥勒に付随するかたちで半跏思惟像を伴う傾向がある。さらに単独像の菩薩形、あるいは如来形の例が観察される。半跏思惟像は朝鮮半島に流入すると弥勒菩薩として認識され、日本古代にも継承される。

中国の弥勒像形成期において、菩薩形としての造形化の中に如来の要素が取り込まれる折衷的図像作例が散見される。菩薩としての現在と、如来としての未来の要素の併在である。

弥勒菩薩の兜率天を描く浄土図、ないし兜率天宮の図様はインド・中央アジアに初期的図様が生成し、中国・隋唐時代に完成へと向かい、晩唐から五代にかけて定型化ないし形式化する。

なんらかの契機があり、日本の中世初期に兜率天浄土図(兜率天宮図)の表現意欲が高まり、種々のバリエーションを来す。しかし阿弥陀浄土図のように、図様が画一化することはなかった。

日本中世の弥勒信仰の再興は、明恵や貞慶などの顕密仏教側の学僧の役割が大きく、限定的ながらかなりの広がりをみせる。

しかしこの研究過程で、なお未解決の課題も多く残されていることが浮かび上がってきた。

### 2. 研究の目的

弥勒は未来の仏と予言され、現在は兜率天に菩薩として浄土を主宰しているとされる特異な存在である。インドに発し、東アジアに広く展開・造形化された弥勒は、菩薩と如来の二種の尊格をもつが、菩薩としての弥勒は現世と浄土、此界と他界、密教道場と本拠、など複数の世界を行き来する性格を持つ。これを「間・世界性」と呼ぶことにする。その特殊性を表すに当たり、交脚形、半跏思惟形、倚坐形、結跏趺坐形、立像形と多様な姿をとって来た。菩薩の居所観も浄土での説法、現世への来迎、観想道場への現身、といった「間・世界性」ならではの特色ある信仰に裏打ちされている。こうした視野のもと、中央アジアから中国・朝鮮半島・日本における弥勒およびその浄土の図像的系譜と宗教的観念の対応関係を考察するのが、本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

本研究の方法は、A 実地調査と、B 資料収集・分析からなる。

A はさらに(1) 仏画・絵画遺品の調査、(2) 仏像遺品の調査、(3) 画像・図像資料の取得、に分かれる。主題別研究としては、弥勒菩薩の単独像、同集合像、弥勒浄土図(兜率天宮図)と他仏浄土図、来迎図・来迎像に区分けする。遺品の取得画像はデジタル・データ化し、研究への便宜を図るとともに報告書作成による成果公開をめざす。

B は、(1) 弥勒上生信仰の広域的な変化と遺品との対応関係、(2) 東アジア地域における図像系統と影響関係、(3) 各地域における弥勒浄土観と他仏浄土観の習合のあり方、(4) 弥勒浄土図の垂迹美術への反映、の諸点に着目して分析を進める。

### 4. 研究成果

(1) 山西省平順県の大雲院弥陀殿に残る仏後壁画は、残存している部分はわずかであるが、図様および弥勒上生経経幢の存在から五代期の弥勒上生経変である可能性が高いことが判明した。

(2) 山西省高平市の開化寺大雄宝殿の壁画は、北宋紹聖 3 年(1096)郭発なる画工の制作になるが、その北壁東側の壁画は従来からいわれている観音法会ではなく弥勒上生経変であることが確かめられた。この時期の中国中原におけるほぼ完好な遺例としてきわめて重要である。その中尊の弥勒図像は、北宋中国で規範性が高い高文進様であるとみなされる。また史料からは、この地域に唐時代から弥勒上生経変が描かれていたことが判明した。

(3) 河西地区の酒泉にある文殊山万仏洞は、本研究第一次調査で訪問した遺跡で、弥勒上生経変壁画を擁する。開化寺壁画の調査後、その全体の構成が開化寺様に極めて近いことが新たに確認された。西夏期の制作であるが、西夏王朝は北宋文化の摂取に熱心であったことも勘案すれば、なんらかのルートで開化寺様の図像情報が文殊山万仏洞壁画に伝わっていたと考えられる。

(4) 新疆トルファン地区ジムサル県の北庭高昌回鶻仏寺址(西大寺ともいう)について現地見学をした。西ウイグル王国期の仏教寺院址であり、その E204 龕に弥勒上生経変が残存する。小規模ながらその図像は西夏期の文殊山万仏洞壁画と極めて近く、両者の影響関係は明確である。改めて図像を検討した結果、おおかたの中国研究者が考えるように西大寺が先行して文殊山に影

響を与えたのではなく、逆向きを想定したほうが妥当と思われる。

(5)地理的に離れた開化寺、文殊山、北庭高昌回鶻仏寺址の三者は、図像的に同一系統に属していることが初めて認定された。敦煌莫高窟壁画の図像的系譜とは別に、中国中原から東トルキスタン地域に伝播したものと考えられ、中国大陸における弥勒上生経変図像の二大潮流のひとつが新しく抽出できたといつてよい。

(6)日本中世の弥勒上生経変、つまり兜率天曼荼羅に特徴的な斜め構図は、中国大陸ではまったく発見することができない。中国・中央アジアの遺品はほぼすべてが左右対称的な正面構図であり、これが強い規範性をもっている。対して、斜め構図は左右非対称が不可避であり、こうした構図への嗜好はきわめて日本的といえるように思われる。

(7)以上のような諸考察は、『平成二九年度～令和二年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書 弥勒造像史における「間-世界性」表現の系譜』(二〇二一年/東北大学リポジトリ)としてまとめ、その成果を公開した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 泉武夫	4. 巻 29
2. 論文標題 印度・中国・日本の弥勒信仰与美術 - 兜率天的菩薩像及其源流	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国美術研究	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 7
2. 論文標題 感応と図様 仁寿舍利塔に見る表象形式と思想	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア仏教美術論集 東アジア（隋・唐）	6. 最初と最後の頁 255-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩佐光晴	4. 巻 679
2. 論文標題 クスノキ製木彫像をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 MUSEUM	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩佐光晴	4. 巻 22
2. 論文標題 創建期長谷寺の十一面観音像に関する覚書	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美学美術史論集	6. 最初と最後の頁 95-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島幸代	4. 巻 0
2. 論文標題 仏像が壊れることをめぐる諸問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本近代における イコノクラスム 破壊をめぐる視覚表象研究(平成27-31年度科学研究費補助金基盤研究(B)報告書)	6. 最初と最後の頁 21-29
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 3
2. 論文標題 奈良時代東大寺における「天」の意義と造形	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『東大寺の新研究 東大寺の思想と文化』(法蔵館)	6. 最初と最後の頁 185-225
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大島幸代	4. 巻 7
2. 論文標題 迦毘羅神考 靈泉寺大住聖窟における造像を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アジア仏教美術論集 東アジア(隋・唐)』(中央公論美術出版)	6. 最初と最後の頁 133-162
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泉武夫	4. 巻 39
2. 論文標題 中世尺八の肖像 - 朗庵像をめぐって -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美術史学	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 -
2. 論文標題 空海の思想と草創期高野山の伽藍と仏像	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 空海と高野山の至宝展目録	6. 最初と最後の頁 24-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泉武夫	4. 巻 3
2. 論文標題 奥州藤原三代の絵画－経典変相図の浄土教的世界	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 平泉の文化史	6. 最初と最後の頁 113-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泉武夫	4. 巻 9
2. 論文標題 宋画の表現－普悦筆「阿弥陀三尊像」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『アジア仏教美術論集 東アジア (南宋・大理・金)』(中央公論美術出版)	6. 最初と最後の頁 159-190
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泉武夫	4. 巻 -
2. 論文標題 北宋・西夏・西ウイグルの弥勒上生経変－開化寺・文殊山万仏洞・北庭回鶻仏寺址	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 弥勒造像史における「間・世界性」表現の系譜	6. 最初と最後の頁 21-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 泉武夫	4. 巻 -
2. 論文標題 兜率天曼荼羅の斜め構図をめぐる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 弥勒造像史における「間 - 世界性」表現の系譜	6. 最初と最後の頁 79-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 泉武夫	4. 巻 -
2. 論文標題 兜率天の護法神の形象	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 弥勒造像史における「間 - 世界性」表現の系譜	6. 最初と最後の頁 95-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 泉武夫	4. 巻 -
2. 論文標題 「感得」の位相 - 覚書 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 弥勒造像史における「間 - 世界性」表現の系譜	6. 最初と最後の頁 109-121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩佐光晴	4. 巻 -
2. 論文標題 日本古代の弥勒関係造像に関する再検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 弥勒造像史における「間 - 世界性」表現の系譜	6. 最初と最後の頁 123-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 -
2. 論文標題 清凉寺「版画弥勒菩薩像」と奄然の弥勒信仰	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 弥勒造像史における「間 - 世界性」表現の系譜	6. 最初と最後の頁 133-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長岡龍作	4. 巻 -
2. 論文標題 渤海出土の仏像と東アジアの仏教信仰 - 二仏並坐と兜率天往生	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 弥勒造像史における「間 - 世界性」表現の系譜	6. 最初と最後の頁 143-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大島幸代	4. 巻 -
2. 論文標題 研究ノート：弥勒菩薩を表す碑像について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 弥勒造像史における「間 - 世界性」表現の系譜	6. 最初と最後の頁 157-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 泉武夫
2. 発表標題 普悦筆阿弥陀三尊像について
3. 学会等名 美術史学会
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 自然景を媒介した彼岸と此岸の表象・自然的要素が組み込まれた寺院の造形空間
3. 学会等名 平泉の仏教的理想空間に係る国際研究会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 泉武夫
2. 発表標題 印度・中国・日本の弥勒信仰与美術-兜率天的菩薩像及其源流
3. 学会等名 華東師範大学（上海）：2018年佛教美術源流国際學術研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 清涼寺釈迦如来像の胎内に見る信仰世界
3. 学会等名 名古屋大学・ハーバード大学国際ワークショップ「像内納入品研究の地平」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 泉武夫
2. 発表標題 隋・唐以降の東アジア兜率天の弥勒信仰と美術について
3. 学会等名 シンポジウム「中央アジア科研全体研究会 - 中央アジアの弥勒信仰と美術 その2」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長岡龍作
2. 発表標題 靈驗仏をつくる 類焼阿弥陀縁起をめぐって
3. 学会等名 シンポジウム「運慶と東国の宗教世界」(招待講演)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 泉武夫	4. 発行年 2022年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 210
3. 書名 古代中世絵絹集成－基底材の美術史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長岡 龍作 (Nagaoka Ryusaku)  (70189108)	東北大学・文学研究科・教授  (11301)	
研究分担者	岩佐 光晴 (Iwasa Mitsuharu)  (10151713)	成城大学・文芸学部・教授  (32630)	
研究分担者	大島 幸代 (Oshima Sachiyo)  (60585694)	龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員  (34316)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------